岩野泡鳴主幹雑誌『日本主義』第一巻調査報告

太田直樹

一、はじめに

今回、岩野泡鳴主幹雑誌『新日本主義』、及び改題後の『日本主義』（第十号より）第一巻（一号～十二号）について、『岩野泡鳴全集』（臨川書店、平成六年～平成九年、以下『全集』と記す）未収録号を調査した。具体的には、『新日本主義』第一巻第三号～第七号、第九号、及び『日本主義』第一巻第十号、第十二号について、大谷大学図書館並びに立命館大学図書館の両図書館の御協力のもと調査を行ったため、本稿にて調査結果を報告する。

『日本主義』は、大正五年一月に泡鳴が創刊した月刊の思想文芸雑誌である。創刊当初は『新日本主義』と名付けられていたが、大正五年十月の第一巻第十号にて『日本主義』と改題、その後、泡鳴が亡くなる直前である、大正九年三月の第五巻第三号まで現在確認されており、同時代の思想や社会、文芸に対する泡鳴の意見発表機関としての役割を果たした。[1]『日本主義』[2]は、泡鳴の唱える「個人主義的国家主義」の思想及びその運動を考察する上でも、また晩年の泡鳴の交友関係を知る上でも重要な雑誌だと言えるが、現在、その全体像が明らかになっている訳では無い。具体的には、『全集』刊行時点において、第一巻第一号・第二号・第八号・第十一号、第二巻第一号～第十二号、第三巻第一号～第八号、第四巻第三号・第四号・第六号、第五巻第一号～第三号までが確認されており、これまで、特に第一巻及び第四巻が散逸した状況にあった。

今回の調査により、『日本主義』第一巻分の全貌を知ることが出来た。本稿では、本調査により明らかになった次の三点の項目について報告を行う。まず、『日本主義』第一巻の編集体制の変化について、『日本主義』同人の集まり、雑誌の経営状況、雑誌の改題の点から簡潔にまとめたい。

次に、旧全集である『泡鳴全集』（国民図書株式会社、大正十年一月～大正十一年七月）第十巻「日本主義」に収録されている初出未詳資料のうち、『日本主義』第一巻に収録されている資料に関しては、初出が確定した。この各資料に関して、それぞれ解題を付すことは紙面の都合上困難であるため、本稿では、泡鳴執筆分と考えられる資料について、『日本主義』第一巻各号の目次を記すこととする。

最後に、今回の調査により『全集』未収録資料が発見された。未収録資料に関して、各資料の性格ごとに分類すると、『日本主義』の編集に関して各号の「編輯者より」。断片的な、あるいは警句的な短い短文である、第一巻第六号以降の「断片」、及び第一巻第三号「文字ポンチ」。複数の執筆者によるコラム記事である、第一巻第四号及び第一巻第十号「食後の別室」。新刊紹介記事である、第一巻第三号の「『改造の試み』その他」及び第一巻第六号の「『短歌私鈔』その他」。最後に批評・評論として、第一巻第四号「三田の俗聖（田中王堂氏の「福澤諭吉」を評す）」及び「日本語のアクセント」、第一巻第七号「身づから卑賤と呼ぶか」、第一巻第九号「郷土と日本」がある。このうち、「三田の俗聖（田中王堂氏の「福澤諭吉」を評す）」及び「日本語のアクセント」に関しては、分量・内容においてまとまった評論であるため、本稿にて簡潔に紹介する。加えて、『全集』別巻には、泡鳴第三の妻、蒲原英枝の資料がまとめられていることから、本調査で新たに発見された、蒲原英枝「以太利人の浦島」（『新日本主義』第一巻第五号）に関しても、合わせて紹介する。

二、『日本主義』第一巻の編集体制について

『新日本主義』第一巻第四号には、口絵として、『新日本主義』同人の会合の写真が掲載されている（図版一）。この会合に関しては、口絵裏面の「写真説明」（図版二）に詳しく、また『巣鴨日記第三』大正五年二月廿七日にも、「新日本主義社の小集を家で開いた」（第十四巻一八一頁）とある。この集まりに参加した、廣瀬哲士、加藤朝鳥、木村卯之や、他に三井甲之らが主に執筆者として活躍し、誌面の充実を見せているものの（図版三）、雑誌の経営状況はこの頃から既に芳しく無かったようである。『新日本主義』第一巻第六号から、本欄の頁数が三十二頁から十六頁に半減することとなったのも、経営上の理由によるものであろう。

経営悪化の要因の一つとして、山本露滴が「健康上の都合」により樺太から帰京したと、『新日本主義』第一巻第七号（「編輯者より」、一九頁）で報じられたように、創刊当初から資金的援助を受けていた露滴の健康が悪化したことが考えられる[3]。同号に、「新日本主義社は今回実際の経営をも泡鳴がすることになつた」（「編輯者より」、一九頁）とあるのは、

露滴の援助のみでは経営が困難になったからであろう。これに伴い、同号より発行所の新日本主義社は、『新日本主義』の母体である露滴主催の『日本新聞会』の発行所の住所、「東京市牛込区矢来町十一番地」から、泡鳴宅の住所、「東京市外巣鴨町一〇八二」へと移転する。更に、「新日本主義社新設規則」（目次では「新日本主義社の新規定」）が制定され、同号以降の各号に掲載される。この規則は、「一、本部は岩野泡鳴その他数名が『新日本主義』の編輯発刊、並に支部との文通、並に宣伝演説遊説を担任す」（一六頁）とあるように、編集発刊を行う本部と地方の応援者による支部からなる新日本主義社の体制を定めることを主な目的とするものである。同号「編輯者より」には、「それから、なほ実際的な運動をいよ〳〵初めかけるに付いては、読者と本部との密接な聯絡を取りたいので、地方の読者はこの際有志の入会を勧誘して貰ひたい」（一九頁）とあり、新日本主義社の運動を地方にまで拡大しようする泡鳴の気概が感じられる。

第十号発刊を契機に、『新日本主義』は『日本主義』に改題される（図版四）。今回の調査により改めて、『日本主義』への改題が第一巻第十号からであることが実物を通じて確認された。これに伴う変化として、まず、各号の一頁目上部に掲載されていた「宣言」が、「成るべくみんなに共通するやうに書き換へ」（「改題の辞」、一頁）られる。次に、同号より雑誌代の支払い方法が、雑誌代の送付から口座への振り込みに変更される。同号の表表紙裏「『日本主義』講読方（ママ）に就いて注意」では、この変更について「追つて雑誌代は一ヶ年僅かに六拾銭ですから、成りべくは此際御払込を（振替口座番号は東京参四〇七九番）」と告知している。最後に、「今回泡鳴の友人川手忠義氏が泡鳴と共に協同の主幹になることになつた」（「編輯者より」、一六頁）とあるように、泡鳴は、第二の妻岩野清への離婚請求の際に相談を行った弁護士川手忠義に協同主幹を依頼しており、『日本主義』第一巻第十号の一頁目には主幹として岩野泡鳴・川手忠義両名の名が掲げられている。しかし、「川手氏よりハガキ、協同の主幹の件を断つて来た」（『巣鴨日記第三』大正五年十月十三日、第十四巻一九七頁）という事情から翌月には川手は主幹から外れ、次号の『日本主義』の主幹は再び泡鳴一人に戻る。

三、『日本主義』各号目次

以下、今回の調査で明らかになった『日本主義』第一巻八号分の各号の目次について、泡鳴執筆分と考えられる記事のみ、頁数順に掲載する。泡鳴を含め複数の執筆者によるものは、その執筆者を掲げ、無署名のものはその旨を記す。ただし、第一巻第五号に掲載された、蒲原英枝執筆分のみ例外的にここに掲載する。

①『新日本主義』第一巻第三号（大正五年三月一日）
断片語――一～三頁。／再び日蓮の研究に就て（山川智應氏へ）――四～六頁。／文字ポンチ（無署名）――十頁。／発想と人格（再び野口氏を論ず）――十一～十四頁。／固定は真理にあらず――二十六～二十八頁。／編輯者より（無署名）――二十八、三十二頁。／すゐせん道化者（散文詩）――三十一頁。／『改造の試み』その他（無署名）――三十二頁。

②『新日本主義』第一巻第四号（大正五年四月一日）
断片語――一～三頁。／三田の俗聖（田中王堂の「福澤諭吉」を評す）――四～十三頁。／日本語のアクセント――二十一頁。／蜜蜂の霊よ（諷刺詩）――二十七頁。／僕等を未成品とは？――二十九頁。／食後の別室（甲之、朝鳥、泡鳴）――三十～三十二頁。／編輯者より（無署名）――三十二頁。

③『新日本主義』第一巻第五号（大正五年五月一日）
穿き違へた自由――一頁。／日本膨張の根本原理（後藤男爵の著を評しながら）――二～七頁。／以太利人の浦島（蒲原英枝）――二十五～二十七頁。／用語に無反省な蘇峯氏と井上博士――二十八～二十九頁。／今一度山川氏へ――三十頁。／編輯者より（無署名）――三十～三十一頁。

④『新日本主義』第一巻第六号（大正五年六月一日）
断片――表表紙。／功利主義を恥るな――一頁。／佐藤信淵の征服的宗教――二～七頁。／スコト氏の『日本、英國及び世界』――十五～十六頁。／『短歌私鈔』その他（無署名）――十七頁。／編輯者より（無署名）――十七頁。

⑤『新日本主義』第一巻第七号（大正五年七月一日）
断片――表表紙。／タゴル氏に直言す――一、七、十五～十六頁。／佐藤信淵の征服的宗教（承前）――二～七頁。／身づから卑賤と呼ぶか――八～九頁。／表象の語義（山川氏の第三答に就て）――十四～十五頁。／新日本主義社の新規定（無署名）――十六頁。／編輯者より――十九頁。

⑥『新日本主義』第一巻第九号（大正五年九月一日）
断片――表表紙。／警戒すべき世界主義――二～七頁。／郷土と日本――九頁。／兎の憤激（諷刺詩）――

十一頁。／迂愚極はまる宣教師――十四～十五頁。／日記の一節――十五～十六頁。／編輯者より（無署名）――十七頁。

⑦『日本主義』第一巻第十号（大正五年十月一日）

断片――表表紙。／改訂の宣言（無署名）――一頁。／改題の辞――一頁。／国家主義並に個人主義の独断的区別の撤廃――四～九頁。／生活の寂しみ（散文詩）――十二～十四頁。／食後の別室（卯之、甲之、秋田雨雀、泡鳴）――十二～十四頁。／編輯者より（無署名）――十六～十七頁。

⑧『日本主義』第一巻第十二号

断片――表表紙。／親遠疎近の弊――一頁。／日本人とユダヤ人（撰民の観念に就て）――二～四頁。／忠愛主義懐疑の徒――五頁。／ラザロの姉妹マルタ（散文詩）――十四～十五頁。／編輯者より（無署名）――十七頁。

四、『岩野泡鳴全集』未収録作品概要

以下、『全集』未収録作品のうち、「三田の俗聖（田中王堂氏の「福澤諭吉」を評す）」及び「日本語のアクセント」の二作品、加えて蒲原英枝「以太利人の浦島」の計三作品について、その概要を簡潔に記す。

①岩野泡鳴「三田の俗聖（田中王堂氏の「福澤諭吉」を評す）」（『新日本主義』第一巻第四号、四～十三頁）

十頁にわたる、当該号の中心となる論文である。表題の「三田の俗聖」とは福澤諭吉を指し、三田の大学では「丸で人間ではなく完全無欠の神のやう」（五頁）に崇められていることに対する皮肉である。『巣鴨日記第三』大正五年二月廿四日に、「「三田の俗聖人」（田中氏の「福澤諭吉」を評す）四十七片を書き終つた（新日本主義四月号の為め）」（第十四巻一八一頁）とある。

論の冒頭では、青年時代の洗礼の経験から、「福澤諭吉の物質的勢力に対して新島襄の精神的勢力があることを知つた」（四頁）と述べ、福澤自身やその周囲の噂を聞く限り「偏物質的と云ふよりも金銭的な臭ひ」（五頁）がすると、福澤の低俗さを強調する。この、十代の頃の泡鳴が福澤と新島とに抱いた印象に関しては、「僕の十代の眼に映じた諸人物」中の「周囲の活人物」（第十五巻二五一～二五二頁）の記事と重なるところがある。論文では、著述を通じた福澤の民間での功績は認めつつも、田中王堂『福澤諭吉』（実業之世界社、大正四年十二月）の福澤観について、福澤の哲学者とし

ての洞察力に乏しい点、生涯を通じて思想の進歩があまり見られない点、またその思想が西洋文明の模倣に過ぎず独創性に欠けた点から批判し、福澤を偏物質的な、浅薄な功利主義者であったと捉える。結論としては、「要するに、渠の一生涯を通じての一大特色は民間に於ける古今未曾有の教育家たる点に在つたが、その過半は天下の無智と模倣癖との然らしめたところだ」（一三頁）と泡鳴の福澤観がまとめられている。泡鳴による一連の王堂批判の一つとして、また泡鳴の福澤観を知る上で有益な資料の一つであると言えよう。

②岩野泡鳴「日本語のアクセント」（『新日本主義』第一巻第四号、二十一頁）

英語やドイツ語のアクセントは音の強弱によるが、日本語のアクセントは音の高低が主であるという論旨のもと、東京人と大阪人のアクセントの違いを中心に、日本語のアクセントの特徴について論じている。『巣鴨日記第三』大正五年二月九日に、「「すゐせん道化者」（詩）、「日本語のアクセント」（共に新日本主義へ）」（第十四巻一八〇頁）とある。「兎に角、発音上の研究は東京語よりも大阪語に面白味があるやうだ」（二一頁）とまとめられているように、大阪言葉に対する泡鳴の関心を示す評論の一つである。

③蒲原英枝「以太利人の浦島」（『新日本主義』第一巻第五号、二十五～二十七頁）

新潟のホテルイタリア軒の創始者、ピエトロ・ミリオーレと、蒲原英枝の祖父との交流に関するエピソードである。表題は、ミリオーレが約三十年ぶりにイタリアへ帰国したところ、誰にも相手にされず再び日本に戻って来たという話を聞いた英枝が、「私は直ぐ浦島の話やリプヴンキンクルの話を思ひ出しました」（二七頁）と述べるところによる。最後に『新日本主義』にこのエピソードを投稿した理由として、「兎に角に国と云ふ力強い背景を持たぬ人間若しくは個人としては、つまりは斯う云ふ同情には価へするけれども実質に乏しい生活者になると云ふ確かな一実例であらう」（二七頁）と述べ、国家と個人との結び付きを強調する形でまとめられている。

以上。

付記　貴重な資料の閲覧をご許可下さった大谷大学図書館、立命館大学図書館に厚く御礼申し上げます。

注

1　宗像和重「解説・解題」〔『岩野泡鳴全集』第十三巻（臨川書店、平成八年）、五二二―五五二頁〕の「新日本主義　日本主義」（五四〇―五四二頁）の項目、及び『日本近代文学大事典』第五巻（講談社、昭和五十二年）の「日本主義」の項目（伴悦執筆、三一〇頁）を参照。以下、『岩野泡鳴全集』より泡鳴のテキストを引用する際には、巻数及び頁数のみ記す。なお、引用の際には、基本的に旧字体を新字体に直している。

2　以下、『新日本主義』と『日本主義』の区別を付けず、雑誌総体を示す際には『日本主義』と表記する。

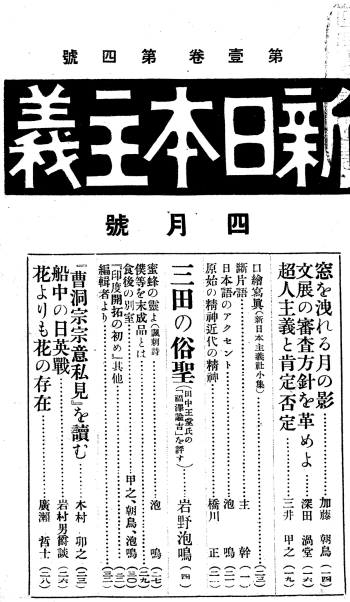
3　山本露滴は、泡鳴の終生の友人であり、「五部作」に登場する島田氷峰のモデルとなった。大正五年十二月一日に亡くなり、翌年一月、泡鳴は『日本主義』第二巻第一号に「故露滴山本喜市郎の伝」を掲載、翌二月には川俣馨一と共に『山本露滴遺稿』（自家版）を編集する。

【図版一】『新日本主義』第一巻第四号「口絵」

【図版二】『新日本主義』第一巻第四号「写真説明」

寫眞説明――二月二十七日、『新日本主義』編輯所に於いて小集を催し、山鳥の馳走をした。午前十一時から集り、撮影して食事になつたのは午後二時頃であつた。食後もまた話がはづみ、遅くまで殘つた連中は晩餐をしてから午後八時頃散會。寫眞は向つて右より後列廣瀬哲士、岩野泡鳴、加藤朝鳥、前列大須賀乙字、田中王堂、木村卯之、山本露滴の七氏。なほ當日の招待に欠席者は若宮卯之助、森田恒友、深田渦堂、武林無想庵の四氏であつた。

【図版三】『新日本主義』第一巻第四号「表紙」



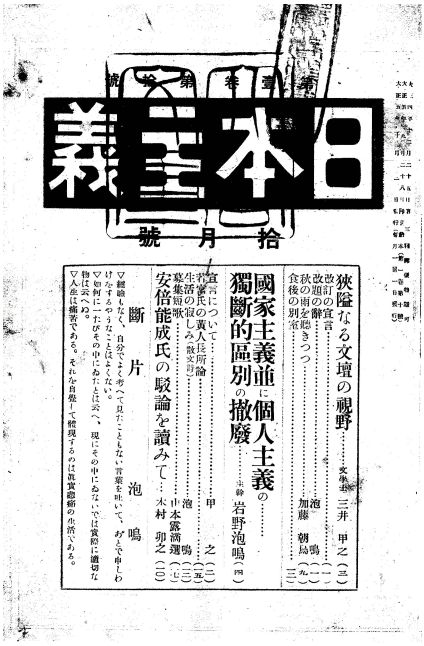
第壹卷第四號

新日本主義

四月號

窓を洩れる月の影……加藤朝鳥（一四）
文展の審査方針を革めよ……深田渦堂（一六）
超人主義と肯定否定……三井甲之（一九）
口繪寫眞（新日本主義社小集）……主幹（一）
斷片語……泡鳴（一一）
日本語のアクセント……橋川正（二二）
原始の精神近代の精神
三田の俗聖（「田中王堂氏の『問題論古』を評す」）……岩野泡鳴（四）
蜜蜂の靈よ（演劇詩）……泡鳴（一七）
僕等を未成品とは……
食後の別室……甲之・朝鳥・泡鳴（一九）
「日本主義」の初め……其他……（二〇）
編輯者より……（二二）
「曹洞宗宗意私見」を讀む……木村卯之（三）
船中の日英戰……岩村男爵談（一六）
花よりも花の存在……廣瀬哲士（一八）

【図版四】『日本主義』第一巻第十号「表紙」



第壹卷第拾號

日本主義

狹隘なる文壇の視野……文集抄三井甲之（三）
改訂の宣言……（一）
秋の雨を聽きつつ……泡鳴（一）
食後の別室……加藤朝鳥（九）
國家主義並に個人主義の獨斷的區別の撤廢……主義岩野泡鳴（四）
宣言について……甲之（一五）
生活の寂しみ（散文詩）……泡鳴（一五）
蓼集短歌……中本紫雨運（一七）
安倍能成氏の駁論を讀みて……木村卯之（一〇）
斷片……泡鳴
▽經驗もなく、自分でよく考へて見たこともない言葉を吐いて、がさで申しわけなかるやうなことはよくない。
▽何に云へぬ、たばその中にあたとは云へ、現にその中にねないでは實際に適切な物は云へぬ。それを自覺して、發現するのは眞實意卿の生活である。